

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

編集発行 公益財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内
TEL・FAX 083-922-1218

教育者吉田松陰先生に学ぶ

「師弟同行、長所を生かす人材育成」

公益財団法人松風会 理事長 松本 芳之

「教育は人なり」と言われるように、出会った教師に触発されて、学習意欲が喚起された例は多い。国の将来を担う子供たちの教育に果たす教師の役割は大きく、教師とは崇高な使命をもつ仕事であることに、昔も今も変わりはない。そこで、吉田松陰先生の教育の一端について、ご紹介させていただく。

(一) 師弟同行と教育への信頼

松陰先生は、「新見卓識 古人に賀出するあるに非ず、ただ聖賢の口まねをなすのみ。されば師弟諸共聖賢の門人と云ふものなり。同門人の中にて妄りに師と云ひ弟子と云ふは、第一古聖賢へ對して憚り多きことならずや。」①と述べる。古の聖賢から見れば、吾ら師弟は同じ門人であり同志である。師弟同行で共に学び合い、成長し合うとの教育者としての基本的な考えをもっていた。さらに、「氣類先づ接し義理従つて融る。」②と述べ、師弟間、朋友間の気持ちの心底一致していけば、自然に為すべき義も理も行えるようになると言った信頼関係を大切にした教育に心掛けたのである。そのために教育者は、謙虚な態度と共感的な姿勢を大切にしなければならぬとした。

(二) 長所を生かす、長所を引き出す

松陰先生は、「人賢愚ありと雖も、各々一、二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん。是れ亦年来人を閲して實驗する所なり。人物を棄遺せざるの要術、是れより外復たあることなし。」③と述べる。人には一、二の才能がある。それを教育によつて引き出すことが大切であり、そのためには、決して人を見放さないことと述べる。誰もが自分自身の長所に気付くことが、学ぶ意欲を喚起し、新たな成長を引き出すと考えたのである。

さらに、人材を育てることについて、各々の能力には限りがあることを認めつつも、「學中の人をして一材一能各々卓然として造詣する所あらしめ、而して世儒と撰を異にせば、十人ならば則ち十人の益あり、百人ならば則ち百人の益あり、合すれば則ち有無相通じ、離るれば則ち各々其の能を以て用と為す」④と述べる。各々が自己の素質や長所を磨くならば、十人集まれば十の益があり、百人集まれば百の益となる。皆の力を合わせれば、お互いの短所を補い合つて大きな力となり、各自の能力は、きつと社会に

役立つと考えられた。

松下幸之助氏は語る。「人間というものは、誰でも長所と短所を持っている。：部下の短所ばかり見たのではなかなか思い切つて使えないし、部下にしても面白くない。その点長所を見ると、その長所に従つて生かし方が考えられ、ある程度大胆に使える。部下も自分の長所が認めてもらえれば嬉しいし、知らず識らず一生懸命に働く」。⑤人の心を動かす偉人に共通性を感じる。

現代社会は、変化の激しい不透明な時代であると言われるが、このような時だからこそ、現在でも決して輝きを失うことのない、松陰先生の教えを学ぶことは極めて意義のあることであり、今、往事の事績に振り返り、その遺訓を広く緋いていくことが大切ではないかと私は考える。

註

①「全集三卷」「講孟余話」頁二二一

②「全集四卷」「諸生に示す」頁三五八。松陰は、「余寧ろ人を信ずるに失するとも、誓つて人を疑ふに失することなからんことを欲す。(たとえ人を信じて失敗したとしても、けつして人を疑つて失敗すること)はしたくない。」と述べる。(「全集三卷」頁九八)

③「全集二卷」「福堂策」頁一六八

④「全集六卷」「治心氣齋先生に與ふる第三書」頁三二九

⑤「松下幸之助「二日一話」「PHP文庫」一九九九年頁三三



「現代に生きる松陰先生」に学ぶ

公益財団法人松風会

前理事長

田村

洋幸

一 はじめに

新任校長として赴任した本郷村（現岩国市本郷町）は山代地方（旧玖珂郡北部）の中心地で、かつて代官所（勘場）が置かれていた地である。松陰先生の実兄、杉民治が代官として勤めていた所でもあり、更に松陰先生の一番弟子とも言われた増野徳民の出身地でもある。ここ本郷で松陰先生のことを学ぶのは必須と思っていた時、松風会主催の松陰研修塾があることを知り、受講し始めて以来、三十年近い年月を経て、現在に至っている。受講生から始まり、理事、理事長を務めさせて頂き、高齢を理由にこの度、理事長を交代して頂くことになり、感謝と共にほっとしているところである。



弟子 増野徳民の墓(岩国市本郷町)

二 松陰先生の歩いた道を訪ねて

（巡見の思い出）

毎回の研修塾は、深く、広く、自分にとってまさにこれ以上の生涯学習は無いと感じている。

中でも松陰先生の足跡を訪ねる研修視察は忘れることができない。これまで、長崎、平戸、下田、新潟、佐渡、そして「みちのく松蔭道」を歩き、竜飛岬で、松陰先生が眺めたであろう津軽海峡を、松陰先生になりかわった気持ちで眺めた体験は今も忘れられない。

下田踏海で松陰先生が金子重之輔と共に上陸したという海岸に立った時、歴史で学んだことが実際にあったんだ、ということが実感できた。その他沢山の思い出は書き尽くせない。

三 現代に繋がる留魂録

先に、暗殺で倒れた安倍元総理の妻、昭恵さんが追悼文で「・・・主人も政治家としてやり残したことはあっただろうが、本人なりの春夏秋冬を過ごして最後の冬を迎えた。種をいっばい蒔いているので、それが芽吹くことでしょう・・・」と述



松陰先生上陸所碑（下田市）

べられた、という趣旨の記事が某新聞で紹介されていた。これは松陰先生の「留魂録」からの引用だと思われるが、まさに現代も生きていく松陰魂の証ではないだろうか。

その一節の一部を紹介する。（参照『吉田松陰撰集』）

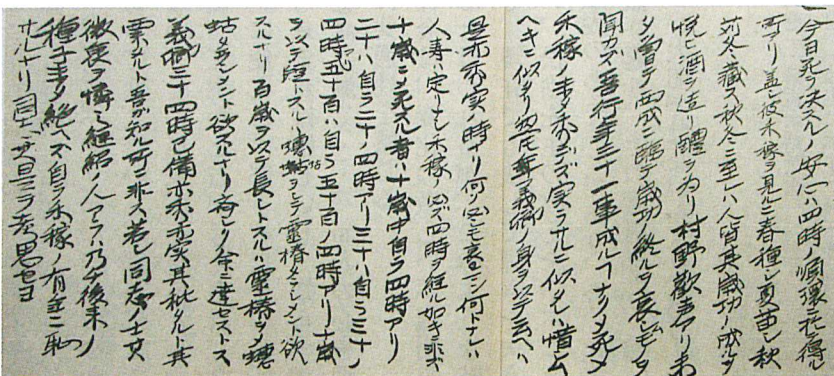
「・・・春種し、夏苗し、秋蒔り、

冬蔵す。秋冬に至れば人皆其の歳功の成るを悦び、酒を造り醴を為り、村野歓声あり。・・・十歳にして死者は自ら二十の四時あり。三十は自ら三十の四時あり。五十、百は自ら五十、百の四時あり。十歳を以て短しとするは蟪蛄をして靈椿たらしめ

んと欲するなり。百歳を以て長しとするは靈椿をして蟪蛄たらしめんと欲するなり。・・・」

四 おわりに

最近、研修塾に若い方が多少みられるようになり、大変頼もしく、心強く、嬉しく思う。研修塾を通して、松陰精神の輪が広がり、後世に受け継がれていくことを切に願っている。



※松陰神社所蔵（レプリカから）

松風会の歩み

山口県教育会から松風会へ

○山口県教育会の歩み

幕末、明治維新の激動期に多くの人材を輩出した山口県は、県内教育の振興を目的に、明治十五年、教育に関する諮問講究機関として「山口県教育会」を設立。本会では、併せて吉田松陰の教育精神の研究・研修事業にも務めその一環として、日記、書簡、著書等の膨大な資料をとりまとめ、夙に三回にわたって「吉田松陰全集」を刊行した。

年	主な出来事 (吉田松陰関係のみ記載)
明治一五年(一八八二年)	県令 原保太郎氏が山口県教育会を設立
明治四五年(一九二二年)	山口県教育会附設防長教育博物館開設
大正一一年(一九三二年)	「山口県教育史」編集・発行
昭和 九年(一九三四年)	「吉田松陰全集(定本版)十卷」発行 岩波書店
昭和一三年(一九三八年)	「吉田松陰全集(普及版)十二卷」発行 岩波書店
昭和三一年(一九五六年)	吉田松陰先生百年記念事業準備委員会設立。関連事業として「松風会」誕生
昭和四七年(一九七二年)	「吉田松陰全集(大衆版)十卷」発行 大和書房
昭和五〇年(一九七五年)	「吉田松陰入門」発行 大和書房
昭和五三年(一九七八年)	「吉田松陰遺墨帖」豪華愛蔵版発行 大和書房
昭和五五年(一九八〇年)	吉田松陰先生生誕百五十周年記念事業
平成 元年(一九八九年)	松陰先生殉難百三十年記念事業
平成 二年(一九九〇年)	松陰先生生誕百六十年記念特別事業
平成一一年(一九九九年)	松陰先生殉難百四十年記念山口県民大会・萩大会

○松風会の歩み (山口県教育会から分離独立)

主な出来事 (山口県教育会との関係事業を含む)

年	主な出来事 (山口県教育会との関係事業を含む)
昭和三一年(一九五六年)	【本会の起源】吉田松陰先生百年記念事業準備委員会の事業の一環として、松下村塾にない若者支援のため、山口市鴻の峰山麓に、山口大学の学生寮「松風寮」建設を目的とし、山口県教育会館内に「松風会」を設置。
昭和三六年(一九六一年)	県内外の有志の浄財と県・市町村の補助金により「松風寮」が建設完了。同年竣工式が実施される。「松風会」は山口県教育会館奨学部に所属。
昭和四六年(一九七一年)	財団法人松風会寄付行為認可
昭和四九年(一九七四年)	山口県教育会から分離独立、新たに「財団法人松風会」として設立。「吉田松陰先生を崇敬し、松陰精神の普及振興を図り、併せてこれを現代に生かす。」ことを目的とする。
昭和五八年(一九八三年)	「吉田松陰先生東送之碑」建立。(阿武郡旭村佐々並夏木原) 揮毫は元内閣総理大臣岸信介氏
昭和五九年(一九八四年)	松陰教学シリーズ発行開始。「シリーズI『松陰の教学と杉家』」「シリーズII『吉田松陰の甦る道(上)』」「シリーズIII『吉田松陰の甦る道(中)』」「シリーズIV『吉田松陰の甦る道(下)』」刊行
平成 二年(一九九〇年)	松陰先生生誕百六十年記念事業の一環として「松陰の道―県内松陰の足跡を訪ねる―」刊行。(山口県教育会との協賛)「維新先覚吉田松陰」(山口県教育会)刊行
平成 三年(一九九一年)	第一回松陰研修塾(二年間研修)開設される。(その後、令和四年まで十四回実施)「松陰先生に学ぶ―未来にはばたく若人のために―」(山口県教育会)刊行
平成 四年(一九九二年)	萩往還道の駅に、「明治維新の志士十名の銅像と松陰記念館」設置される。
平成 八年(一九九六年)	維新の群像十体は松風会が管理
平成 八年(一九九六年)	松風会設立二十周年記念事業の一環として「脚注解説吉田松陰選集―人間松陰の生と死―」発刊
平成一三年(二〇〇二年)	「脚注解説吉田松陰選集―人間松陰の生と死―」の改訂版増刷
平成一四年(二〇〇三年)	松風会ホームページの開設
平成一九年(二〇〇七年)	松風会設立三十周年記念事業及び松陰殉節百五十周年記念事業の一環として「吉田松陰日録」発刊
平成二一年(二〇〇九年)	松陰先生生誕百八十年記念「わたしの志」作文募集開始(山口県教育機会との共催)
平成二四年(二〇二二年)	公益財団法人登記完了。「公益財団法人松風会」となる。
平成二七年(二〇二五年)	松下村塾「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録される。NHK大河ドラマ「花燃ゆ」
令和 四年(二〇三二年)	第十四回松陰研修塾基礎コース開設(二年間) 会報「松門」第四十四号発行

第十四回松陰研修基礎コース一年次第一回講義内容のまとめ

吉田松陰先生の幼年時代と家族の様子

公益財団法人松風会

理事

ひろなが

よしただ

純忠

吉田松陰は松本村護国山西南麓の団子岩にあった茶亭山莊「樹々亭」で生まれ、十九歳までそこで育った。幼年時代のことが、後年、江戸送りの時の「家大人に別れ奉る」という漢詩の中に残されている。

漢詩の中「耳に存す文政十年の詔、口に熟す秋州一首の文、小少より尊攘の志早く決す、」という三句が生涯松陰が持ち続けた精神的バックボーンとしての根本思想と関係するので、それから紹介したい。

「尊王思想」として、今も耳に残っている。要点は次のようであった。

「文政十年丁亥二月十六日、將軍家齊太政大臣に任じ、世子（跡継ぎ）家慶從一位に敘せられ、詔して家齊陸任（昇任）の事を天下に宣し」給ふという文章で、この後、征夷大將軍の徳川家齊が民衆のための政治を実行し、万民は世が治まり安楽に生活し、外敵が平和を乱すような憂いはなかった。朝廷は益々安心し、日本国内はいよいよ平和であったと述べ、続いて家齊が京都の御所の内裏

の焼失に力を注ぎ、内裏を新たに造営させ、昔の姿に修復した。また、すたれていた政等も再建した。その功績も立派であった。家齊は征夷大將軍にはなっていないがまだ学事関係の役職にはなっているため朝廷から太政大臣に任命されたのである。」

このように太政大臣という役職に任命された場合、本人が京都に参上してお礼を述べなければならぬのに家齊は江戸において、家臣を京都に参上させて朝廷にお礼を述べさせた。

松陰の父百合之助は身体や衣服を清潔にし、遙か東方の京都を拜し、「王室が非常に衰えて権威が無くなり、臣下の徳川氏がのさばり出て皇室の権威をないがしろにし、無礼な行動をとるとは誠に嘆かわしい次第である」と嘆かれた。

『杉民治伝』によると、父百合之助は非常な尊王家であったから、子供に対する尊王精神の指導ぶりは徹底していたと述べている。

次に「神国思想」に「口に熟す秋州一首の文」とは『神国由来』（玉田永教著）のことであり、要点のみを述べたい。

「大日本は神の国であり、いざなぎ・いざなみのみことが天照大御神をお生みになった。天照大御神は天上の世界である高天原で三種の神器を持たされ、天津彦彦火瓊瓊杵尊にお授けになり、今まで続いている誠に永遠の限りない神の国である。

士農工商は神の血筋であり、神様からの衣服・食べ物・住居に住み神様の恩を知るべきである。次に儒道が日本に伝わり、日本の仏法について記し、古い仏法は滅び、現在の仏法が生まれ続けていることを述べているが、仏法の元は神の正しい道にして伊勢の大神宮を以て、神国の言語を明らかにしていると述べている。最後に、願わくは神様の加護に依って生きることが神国に得たいと思う。どうして外国に生まれることを願うであろうか、心の源を清らかにして、正直の元に帰ってよこしまな決まりを捨て、仏法の妙なる行いを願う者である。」と結んでいる。

父・百合之助の指導

さてこのような二つの根本思想（尊王思想と神国思想）を松陰や梅太郎の幼少時に父百合之助がどのように指導

したのかを述べてみたい。杉道助が「杉百合之助の教育」と題して次のように書き残している。

わし（梅太郎）が子供の頃、松陰と一緒に父（百合之助）に従って田んぼに出たものじゃ。父は耕しつづ教え、教えつつ耕すというふうには四書五經の素読は大概田んぼの間で学んでしまったのじゃ。父は『文政十年の詔』と『神国由来』にほぼ感銘したとみえて、これをわしに誦読させた。また、会澤の『新論』の写本、茶山、山陽の勤王詠史の諸詩文、中でも山陽の『楠公墓下詩』は、最も愛吟し、米つき、畑うちの片手に朗々と誦したのでわしにも声を合わせて誦したのじゃ。だから、わしは親子の合唱は、毎日、米つきの場から洩れ、田畑から流れた。その声を聞いた叔父の玉木文之進が「やあ、また兄さんが始まった」といって、快よげに笑っていたのを覚えておぼえているよ。松陰も頭が鋭く、三つ年齢の差なんか感じられなかった。わしと競争的に学問したもんじゃ。「話す暇があるならば本を読め」と百合之助の戒めが聞こえてくるようじゃと。

今まで述べたように百合之助の指導には時間や場所の制限もなく、しかも子供達に武士として必要な学問や尊王・神国思想に関する学習も繰

り返し行っているが、子供達は無理なくそれを受け入れ、楽しげに勉強をしている。

父母の教育や人柄からの影響

○杉家の伝統

無駄な話や時間を省き、読書それも忠君愛国に関する書物・詩文や国藩の歴史に関する書物など時間を費やして子どもに指導している。

○神・先祖への信心

神や先祖を崇拜する気持や態度、畏敬の念が特別で、清めの意識が強く、身体・衣服・持ち物等身も心も清潔にしてお参りしている。これは京都を拝する時と同じ状態である。

○人の困窮への対応

無給通りの下級武士で生活に余裕がなく生活も苦しい中、百合之助の母・岸田氏の妹が病気になった時納屋を改造して引き取り、死去に至るまで世話をしている。また妻瀧の姉大藤氏と娘が伝染病に罹った時、引き取って養生をさせたことなど寛容さをもって温かく接している。

幼少時代、父から指導された尊王思想が、後年になっても続いている。即ち、『将及私言(嘉永六年)』では「天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず」と述べ、『松下村塾記(安政)』では「君臣の義、講ぜざること六百余年(源

頼朝が天皇から政治を奪って江戸時代まで続いたことを示す)」と述べている。

また、神国思想については死の直前、堀江克之助宛の書簡の中に、「天照の神勅に(日嗣の隆えまさんこと、天壤と窮りなかるべし)と之れあり候所、神勅相違なければ日本は未だ亡びず。」という言葉を残している。幼少時の教育が生涯心の指針になり、如何に大事かと云うことがわかる。

母・瀧の人柄

○勤儉・忍耐

家禄が少ないため、夫と共に農業を行うと共に、家事や育児も行い、暇を見つけては学業に励んだ。

夫百合之助が役人となり城中に六年余り住んだ。瀧は夫に代わって家事一切を行い、働きぶりは見事なものであった。その上姑に大変能く仕えた。

○子育ての大切さ

瀧は貧困な生活の中、最もこころを砕いたのが子ども達の教育であった。丁寧になお教えさとし、家事があるからと言って勉強を休むことはなかった。

松陰が獄中から妹千代に宛てた手紙に子育てについて書いた文書があるが、これは母瀧の行ったことである。

「凡そ人の子のかしこきもおろか

なるもよきもあしきも、大てい父母のをしへに依る事なり、就中男子は多くは父の教へを受け、女子は多くは母のをしへを受くること、また其の大きがいなり。さりながら、男子女子ともに十歳以下は母のをしへをうくること一しほおほし。：略：然れば子の賢愚善悪に關る所なれば、併しその教へゆるがせにすべからず。併しその教へといふも、十歳以下の小児の事なれば、言語にてさとすべきにもあらず。只だ正しきを以てかざるの外あるべからず。以下略」

○慈愛(仁愛)

父百合之助の「人の困窮への対応」の所で述べたように、瀧は子どもを抱え、岸田氏一家を引き取り病人の看病の他、汚物の処理まで行い、感謝されたという。

又、伝染病に罹った大藤氏夫人を引き取り、看護・介護したのも、畑を耕し、生計が大変苦しい時のことであった。厳しい玉木文之進も「瀧は一人前の男もかなわぬ立派な人だ」と誉めた。

○おおらか・楽天的

家庭が明るく健康に過ごせるように、冗談を言ったり、毎日のように子ども達と裏山にたきぎを拾いに行き風呂を焚いた。

この様な父母の人柄から子ども達

が影響を受けないわけはない。

即ち、寸暇を惜しんであらゆる分野の書物を読む姿や、天皇を崇拜する心、華美に走らず何事にも節約に心掛ける態度、大切なことは事細かに記録に残すこと等である。

家計の状態

萩藩士の実収高は、石高の四つ成り(四割)、それに御馳走米は、百石未満は五石六斗掛り。(御馳走米とは、藩主に差し上げるお米)

杉家の家禄は二十六石。(実質二十三石：借金・返済は嘉永六年)実収高(二十三石)の四つなりから御馳走米を引くと手取高になる。約二十六石の場合、約九石になる。一人一日五合を食するとして、計算すると、二十六石の場合、約五人となる。二十石の場合、約四人を養うことになる。松陰が生れた時の家族は八人、到底家禄だけでは生活できないので、藩士半農の生活を行わざるを得ない。後に、父百合之助が役人として働き、その給料と家禄で九人分の生活費を補った。

仲の良い兄弟妹

貧しくても明るい家庭に育った子ども達は兄弟妹仲良く暮らしたと妹の千代が回想している。

なお、松陰は兄梅太郎にこの後、相談する書簡を沢山出している。

シリーズ

松風会『アーカイブファイル』

アーカイブ『Archive』とは、「保存記録」「書庫ファイル」の用語として用いられています。松風会は、昭和六十年、情報誌『松門』の第一号創刊から、四十年近くに渡って、「松門」及び松風会刊行の書籍を数多く発行してきました。その中には、松風会を築き支えられた方々の貴重な文章が埋蔵されています。

「松門」第三十三号から

松陰研修塾基礎コース（輪読記録）松陰先生の集団教育

松風会 元理事長 故河村 太市



故 河村太市先生

松陰の教育が、その個別教育において優れた特質をもっていたことは、よく知られております。しかし松陰の教育にみられる特質は個別教育にのみあつたものではありません。

いまでもなく松下村塾は一つの学習集団であります。松陰はまた集団教育の優れた指導者でありました。松下村塾の教育が、稀有の実績をあげ得ましたのは、個別教育と集団教育が、あたかも車の両輪のように作用しあつたことによるものだと思うのです。塾生たちは松下村塾という集団の中で、師弟関係・友人関係を通じて、学問し志を確立し、そして志に生きようと覚悟したのであります。

さて松陰の教育における集団教育的側面は、「松下村塾記」（丙辰幽室文稿、安政三年）や、「諸生に示す」（戊午幽室文稿、安政五年）をはじめ、そのほか教育実践記録とでもいえる文章が、丙辰・丁巳、戊午の各「幽室文稿」や、「丙辰日記」、「丁巳日乗」などの日記類に数多くみえるのでありまして、それらを通じて十分に伺い知ることが出来るのであります。ここでは、集団教育についての松陰の考え方がよく表されている前掲の「諸生に示す」（戊午幽室文稿、安政五年六月二十三日）をみておきたいと思ひます。先ず一緒に読んで見ることにしましょう。

（次頁「諸生に示す」参照）
松陰の集団教育についての基本的な考え方は、次頁の文の、「要するに学の功たる、気類先づ接し義理従つて融る」というところにあるように思ひます。気類というの、情意を意味するとともに、また気のあつた仲間という意味をもった言葉であります。ここにいっていることは、学問が効果をあ

これを今一度掘り起こし、多くの方々にご紹介したいとの思いから、新たに「松風会『アーカイブファイル』」として、本コーナーを設けることとしました。この中で、松陰教学に多大なる貢献と功績を残された先達の至言名言の数々をご覧いただきたいと願っています。

げるのは、先ずそこに学んでいる仲間の中で、いくつかの具体的な事項をあげておりますが、それらはいずれも、只今指摘しました基本的な考え方から出ているものであることはいまでもありません。松陰があげております具体的事項の中で注目したいことを簡条的にしてみます。

① 礼法を簡略にし、規則を取り払う。
単純に礼法規則は不要だといっているのではありません。松陰は、「気節行義は村塾の第一義なり、徒に書を読むのみに非ざるなり。」（己未文稿、「馬島に与ふ」、安政六年正月四日）、というところに村塾運営の基本方針をおいているのです。その松陰が、礼法を簡略にし、規則を取り払うというについては、そうすることの、あるいはそうなしうるための前提があるのです。それは先ほど指摘した、「気類先づ接し義理従つて融る」ということです。こ

うした前提となるところをしつかり作り上げる努力があつて、はじめて礼法を簡略にし規則を取り払うことが出来るのです。礼法規則を除けば、集団がよくなつていくなどと考えているのは決してありません。

② 望ましい集団

松陰の念頭にあつた望ましい集団とは、「気類接し義理融る集団」ということになりませんが、それをもう少し具体的にすれば次のようなものであると思われまふ。

◎ 相交・相扶持・相労役する。

集団成員の皆が道を求め道に従いながら相交わり、疾病艱難に対しては互いに助け合い、また力仕事や思わぬ出来事に対しては皆が力を出しあうような集団、そしてお互いがあたかも自分の手足のように、また親兄弟のように陸みあつていような集団であります。

◎ 自得したことは語る。

学問する者の態度として、自得したものが無いのに多言することは厳に慎まなければならぬが、反対に、何か一つでも自得したものがあつたらば誰にだつて語りかけるべきだといつております。自得したものがあつたのに発言しないのは、松陰が甚だ嫌つたところでありまふ。そして会話には冗談や滑

稽さをはさむことが求められています。

◎質疑応答しあう。

書物はしっかりと読まなくてはならないが、書物に書かれていることは過去のもので、今実行することとの間にずれがあるのは当然のことだといえます。「書は古なり、為は今なり」というのがそれです。このずれをどう調整してみるか、ここに問題が生じます。また「開悟時あり」、つまり人には悟る時期の早い者と遅い者がいるのだから、遅い者が早い者に尋ねることは当たり前前のことです。ここにおいて互いに質疑応答を交わされなければならぬのです。

③望ましい学習環境

吠吠において学を講じていた谷三山の実践の中に、「有徳の言」を聞き、また王陽明が山水泉石の間で門人を指導した「その理に服」した松陰であります。それは兩人から学習の環境ということについて示唆をうけたものではないでしょうか。学習室があり、机があればいいというのではないのです。学習室や机がなければ教育が出来ないと思うのは大きな間違いだという示唆をうけたといえましょうか。そのこともあって松陰は、「米を舂き圃を鋤くの拳」を行いながら塾生の教育に当たっているのです。松陰がこういう仕方教育を行ったのは、先の両者の実践に学んだというよりも、もともとそういう考えかたをもっていた松陰にとつて、両者の実践が我が意を得たりと映ったものと考えた方がいいでしょう。

諸生に示す 「戊午幽室文稿」 安政五年六月二十三日

村塾、禮法を寛略し、規則を擺落するも、以て禽獸夷狄を學ぶに非ず、以て老莊竹林を慕ふに非ざるなり。特だ今世禮法の末造、流れて虚偽刻薄となれるを以て、誠朴忠實以て之を矯揉せんと欲するのみ。新塾の初めて設けらるるや、諸生皆此の道に率ひて以て相交はり、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相勞役すること、手足の如く然り、骨肉の如く然り。増塾の役、多くは工匠を煩はさずして、乃ち能く成ることあるは、職として是れに之れ由る。吾れ嘗て大和の谷翁三山を訪ふ。三山曰く、「吾れ充耳を以て學を吠吠に講ず、喜ぶ所は諸生相親愛すること、兄弟骨肉の如く然り」と。因つて数事を挙げて之れを誦ふ。余、時に欣羨已まず、謂へらく亦有徳の言なりと。数々諸生の為に之れを道ふ。諸生幸に深く此の意を諒し、久次相授ふ。廣川の門と雖も以て加ふるなし。因つて謂へらく是れ難からずと。又嘗て王陽明の年譜を読む。謂へらく、其の門人を警發するや、多く山水泉石の間に於てすと。竊かに其の理に服せり。吾れは陽明に非ざるなり。然れども朋友の切磋亦當に斯くの如くなるべし。ここを以て會講連業、未だ嘗て繩墨を設けず、交ふるに諧謔滑稽を以てすること匡稚圭が詩を説く故事の如し。近くは米を舂き圃を鋤くの拳の如き、亦此の意を寓

するのみ。擊劍・踏水の二事に至りては、武技の最も切要なるもの、時方に盛夏、邊警又殷にして、一日も弛うすべからず。然れども徒らに視て遊戯と為し、實用を尚ばず、光陰を消し、學業を荒るも、亦慮るべきなり。之れを要するに學の功たる、氣類先ず接し義理従つて融る。区々たる禮法規則の能く及ぶ所に非ざるなり。學者自得する所なくして、啾々多言するは、是れ聖賢の戒むる所なり。而れども偶々一得ありて、沈黙自ら護るは、余甚だ是れを醜む。凡そ讀書は何の心ぞや、以て為すあらんと欲するに非ずや。書は古なり、為は今なり。今と古と同じからず。為と書と何ぞ能く一々相符せん。符せず同じからざれば、疑難交々生ぜん。開悟時あり、乃ち同友相質すること、寧んぞ已むを得んや。然らば則ち沈黙自ら護る者は、自得語るべきものなきに非ずんば、則ち人を以て語るに足らずと為すなり。吾が志は則ち然らず。已に語るべきものなくんば則ち已むも、苟も語るべきものあらば、牛夫馬卒と雖も、將に與に之れを語らんとす。況や同友をや。諸生村塾に来る者、要は皆有志の士、又能く俗流に卓立す、吾れ憾みなし。然れども意偶々感ずる所あり、故に聊か之れを言ふ。六月二十三日、二十一回生書す。

詳細については『吉田松陰撰集』頁四八九〜頁四九一に脚注・ルビ入り・解説が掲載されている。

河村太市先生略歴

河村太市先生は、山口県教育会及び松風会が発行した多くの書籍の執筆・編集に関わられるとともに、平成三年第一回松陰研修塾開設から約二十三年間にわたり、講師としても活躍されました。また、松風会理事長として吉田松陰の研究・研修の普及振興に多大なる功績を残されました。

大正十五年、山口県大島郡生まれ

山口大学教育学部卒

九州大学大学院教育研究科修士課程修了

山口県教育委員会、山口県総務部等に勤務の後、山口女子大学（現山口県立大学）

教授、文学部長、附属幼稚園長等を歴任（退職後）

山口県立大学名誉教授

財団法人山口県教育会 会長

（平成十一年〜十七年）

財団法人・公益財団法人松風会 理事長

（平成二十一年〜二十六年）

平成二十七年逝去 享年九十歳

主な著書

「子ども観の歴史覚書」

〔現代教育科学〕明治図書、一九七九

「山口県教育史」

（編者 山口県教育会 昭和六十一年）

「個人指導の歴史的考察」（平成四年）

「吉田松陰選集」（編者 松風会 平成八年）

「吉田松陰日録」（編者 松風会 平成十九年）

「滝鶴台と妻竹女」（二〇一四年） 他多数

（略歴については、生前最後の著作「滝鶴台と妻竹女」を参考にさせていただきました。）

シリーズ 吉田松陰先生遊学の旅路

松陰先生は、「地を離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ。」との言葉どおりに、長崎、熊本から、江戸、そして東北の青森に至るまでの旅をし、道々の地理を極め、多くの人々に出会いました。その中で、学問や思想を深めながら、国の行く末を考え、今何をなすべきかを思

第一回江戸遊学(前半) — 立志の時

公益財団法人松風会 評議員 陶山 具史

松陰先生(以下「先生」)は約三〇年間の生涯(一八三〇〜一八四九)において、日本各地を遊学ないし遊歴された。九州遊学・第一回江戸遊学・東北遊歴・第二回江戸遊学などだ。先生はそれらを通じて、兵学を始めとする諸学を修められ、国内および世界の情勢を見聞され、有志の人士と交流された。いずれの遊学ないし遊歴も先生の生涯において重要な意味を持ったと考えられるが、中でも第一回江戸遊学は、後記の通り先生が兵学者や師範ではなく俊傑として生きる志を立てられるきっかけとなったことからして、極めて大きな意味を持ったと考えられる。

先生は、江戸に参勤する藩主毛利親公の一行に随伴して、一八五一年から五二年にかけて、藩費で第一回江戸遊学をされた。兵学稽古が公的な目的だった。当時の日本は、徳川幕府の末期で、不当な身分差別・過大な貧富格差・幕藩財政の赤字・天災に加えて、欧米列強の強引な開国要求が重なった内憂外患の時代だった。また当時の世界は、一七八九年

にフランス革命が起り、これを受けて一七九九年からヨーロッパ諸国間でナポレオン戦争が勃発したが、その終結に伴い一八二〇年代から欧米諸国が世界各地を侵略し植民地化していった。いわゆる帝国主義の時代だった。当時は日本も世界も歴史的な大変動期だった。先生はそのような時代に身命を賭して日本人ひいては世界人類のために生きられたのであつて、時代が先生を求めたとも言える。時代が求めれば必要な人物が必ず現れるわけではないことは、世界史を通観すれば明らかであるからして、当時の日本および世界にとって先生が現れたことは実に幸いなことだったと私は考える。

満二一歳の先生は、萩を一八五一年三月五日に出発され、各地の地理・経済・民情などを観察し、関係神社に参拝し、有名古戦場を見学し、作詩などをしつつ江戸に向かわれ、四月九日に江戸藩邸上屋敷で藩主の到着を迎えられた。先生の第一回江戸遊学における住まいは、現在千代田区日比谷公園に

素探求していったのです。また、松下村塾の授業では、机上の学問のみに終始することを好まなかった松陰先生は、実学を重視し、歴史や兵学の講義をする際、積極的に地図を活用したとも語られています。本コーナーでは、幕末期に稀な旅行家の一人ともいわれる松陰遊学の足跡をシリーズで辿りながら紹介します。

なっている江戸藩邸上屋敷内の割当てられた部屋だったようだ。他の長州藩士三名と隣り合わせて四畳半一間に住まわれた。食事は、他の藩士の使用人にご飯だけ炊いてもらい、副食は舐め味噌・梅実類・式日に鰹魚と至って質素で、外食しないように努められた。都会に出ると儉約しなくなりがちだが、藩の金で節約しているのだから、藩の金を江戸に撒くことは恐縮とお考えだった。



東都桜田長州屋敷図
(左側の建物が長州江戸藩邸上屋敷；右側の水面は桜田濠；濠の奥は桜田門橋)

先生は、上屋敷で行われる藩主への定期的な御進講、上屋敷内にある有備館で行われる各種の読会、先生が自ら行われる兵学の講義などに出向かれ、また師事した山鹿素水・安積良齋・古賀謹一郎・佐久間象山の

私塾での読会に通われた。また鳥山新三郎が設けた蒼龍軒で諸藩の志士達と交遊され、乗馬・撃剣の稽古も時々行われた。

先生は、山鹿素水の六代目の子孫の山鹿素水に山鹿流兵学を学ばれ、安積良齋から文学を学ばれ、古賀謹一郎から洋学を学ばれたが、最も大きな影響を受けたのは佐久間象山だった。象山は、漢学者・朱子学者として早くに一家をなし、湯島聖堂の佐藤一斎の門下として名の知れた学者だった。主君である長野松代藩主・真田幸貫が老中となり海防掛となったため、その顧問として海防を研究し始めた。ペリー来航前からいち早く、戒狹の偏見を捨てて視野を世界に広げる必要性を強調し、鎖国攘夷は不可であり、むしろ西洋の科学技術を導入して国力の強化を図ることが目下の急務だと主張した。先生が国禁の海外渡航を一八五四年に企てられたのは、象山が賛同したことによるところが大きい。



佐久間象山

シリーズ

松陰先生に学ぶ教育

松陰先生の心の教育とその教育実践は、洋の東西を問わず、時代を超えて、現在においても決して輝きを失うことはない。本コーナーでは、松陰先生の言葉や生き方から、学校教育、家庭教育、生涯教育に関連する内容を、「子ども



二十一世紀に生きる子どもたちへ

公益財団法人松風会

理事

新江田智司

平成最後の年に退職して、早四年を迎えます。令和という元号に変わり、何か期待するものがありました。令和になってからの四年間を振り返って、世の中で起こった様々な出来事を思い出すと、これから先の時代の不透明感、不安感を感じずにはおれません。

令和元年から始まったコロナ禍の収束は未だ見えません。今年に入っても、ロシアによるウクライナ侵攻、安倍元総理大臣の銃撃事件など、今の時代に果たしてこんなことが起こるのかと、信じがたい事件が起こり、悶々とした日々を送っています。歴史は繰り返すという言葉を改めて感じています。昭和から平成。二十世紀から二十一世紀に変わる時にも同じような気持ちになったことを覚えていてます。一八五九年、十月二十七日『留魂録』に後を託して松陰先生は、享年三十歳でその生涯を武蔵野の地で閉じられています。松陰先生の生きた時代は、外国からの威圧に対して弱腰の外交姿勢を取る徳川幕府の弱体化を目の当たりにし、長く続いた武士の世の中が終わり、新しい世の中への到来を予感させる激動の時代

であったと思われれます。自分の命と引き換えに、次の世代に生きる若者へ自分の想いを託された。松陰先生の言葉には、兵学者であると同時に、教育者である信念が感じ取れます。校長職を仰せつかったと同時に入学した松陰研修塾。退職まで勤務した二つの学校で、二十一世紀に生きる子どもたちに語りかけた松陰先生語録を紹介したいと思います。

その一 光市立東荷小学校

校長初任として赴任しました。この地は、松陰先生の門下生であり、後の初代総理大臣の伊藤博文公の出身地です。地元東荷には、伊藤公記念館も整備され、校長室には、伊藤公の肖像画と合わせて、東荷小学校の創設時のおりに、伊藤公より多額の寄付を受けたことを記す額が掲示してあります。「帰っしと思ひさだめし旅なれば、ひとしほぬる涙松かな」

この句は、松陰先生が死を覚悟して、江戸に護送される途中、萩の街が見納めとなる街道筋の涙松と呼ばれる場所で詠まれた訣別の一首です。誰にも心のより所となる故郷があります。唱歌「ふるさと」には、「志を果たしていつの日にか帰らん」という歌詞があり

もたちに語る」「子どもたちに伝える」との視点から、できるだけ平易な言葉で解説し、シリーズとして紹介します。



ますが、命があるからこそ、その思いは果たせるのであって、松陰先生がこの句を詠まれたのは、もう自分の故郷である萩の町に生きて帰ることはないという、ある意味、自分の生涯を悟った上で生まれ育った故郷の姿を最後に脳裏に焼き付けておく心境であったと思います。故郷を愛することは、そこに住む家族を愛することでもあります。家族愛が、故郷愛に、やがて世界に羽ばたいていった時に祖国愛に広がっていきます。故郷を心から愛する人に悪い人はいないはず。自分を育ててくれた原点は、永久に大事にしてほしいものです。学校を巣立つ卒業式の式辞は、いつも家族を想い、故郷を誇りに思い、忘れない人間になってほしいと願って、講話を結んできました。松陰先生に可愛がられた伊藤博文公が生前住んでいた洋館は、非業の死を遂げる直前に、故郷東荷に移築保存されています。今は、記念館が整備され、彼の銅像がその洋館を見つめ、子どもたちを見守ってくれています。

その二 長門市立明倫小学校

二校目として赴任したのが、松陰先生が師と仰いだ村田清風先生の出身地、長門市三隅。校門を入ると、清風

先生の石像が毅然と迎えてくれます。お隣の萩市にも同名の「明倫小学校」がありますが、学校沿革誌によると、三隅の方が先に命名されたそうです。清風先生の地ならではの命名と、誇り高き伝統を感じます。校名の「明倫」とは、中国の思想家、孟子による「人倫を明らかにする所（以なり）」に由来しています。

学校在職中、子どもたちから「何のために学校はあつて、勉強は、何のためにするのですか。」という質問をよく受けました。そんな時、私は即座に、「学は、人たる所以を学ぶなり。塾條くるに村名を以てす」

この言葉を子どもたちに返すことにしてきました。学問とは、人と獣との違い、人間の素晴らしさを知ること。明倫小学校という学校を卒業したことに誇りを持ってほしいと思いを伝えてきました。教師とは、子どもたちが夢や志を持たせ、実践させることが仕事。

「志を立てて以て万事の源と為す。」
「後来の種子未だ絶えず。」

松陰先生の詩かれた種が、明治維新の原動力になったように、私も命ある限り、二十一世紀に生きる子どもたちのために、これからも細やかではあります。土を耕し、種蒔きをし、花を咲かせ、実を実らせるための手助けをしていきたいと思っています。

シリーズ

資料展示室コーナー

「誓為邦國幹」

（誓つて邦國の幹とならん）
岸信介元総理大臣書

新シリーズとして「資料展示室コーナー」を開設しました。

公益財団法人松風会には資料展示室があり、吉田松陰先生に関する書籍や掛け軸、書、拓本、写真、像などを展示しています。これらの展示物は、昭和五十七年三月の松風寮（山口大学学生寮）の廃止に伴い松風会に移管された物を始め、長年にわたる関係者の皆様のご尽力によって購入した物や篤志家により寄贈された物など徐々に充実してきました。その中から今回は、松風寮から引き継いだ岸信介元総理大臣自筆の「誓為邦國幹」の扁額を中心に資料展示室の様子についてご紹介します。

「誓為邦國幹」について

安政五年の暮、松陰は再び野山獄に繋囚（けいご）されることになった。この時松下村塾の塾生に遺した詩が「村塾の壁に留題す（戊午幽室文稿） 安政五年十二月」（抄）である。

〔漢詩〕松下雖陋村 誓為神国幹

〔読み〕松下は陋村なりと雖も、

誓つて神国の幹とならん

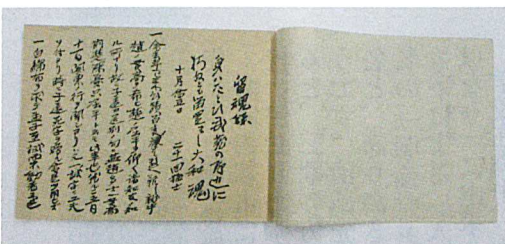
〔意識〕我々の塾のある松本村は、何もない田舎の村だが、必ずや神国日本の根幹となろうではないか。

松陰のこの漢詩は、国の内外の危機に際して、本州西端の片田舎である松本村から、日本国と国民のために、必ずや立ち上がり、我国の根幹となつて活躍する人材が輩出されることを期待した言葉である。ある意味、激動の幕末明治の新たな時代を予言した言葉とも言える。松風会にある岸信介元総理大臣の揮毫は、この言葉を引用し、松門に集う有志を激励した書である。

松陰全集には佐藤信寛（寛作）という人物が登場するが、この人は、岸信介氏の曾祖父である。「近世防長人名辞典（吉田祥朔著）」によれば、松陰より十四歳年上、田布施在住の長州藩士。明倫館に学び江戸で清水赤城に師事し長沼流兵学を修め、松陰に兵要録を授けたとある。海防手当方郡奉行所等に歴任し、明治に入り島根県令となる。安倍晋三元総理大臣は来孫にあたる。



「誓為邦國幹」
岸信介書



「留魂録」
（写し）

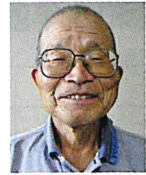


松陰先生座像等
（四体）



展示室内（入口から撮影）

シリーズ 第十四回松陰研修塾基礎コース参加者の思いや感想



松陰研修塾への期待

第一回(六月二十五日)受講者 萩市三見 金子 興道

私は化学系材料メーカーを定年退職し、故郷萩に戻り暮らしをしています。現役時代は技術系だったので、田舎では違った事を経験したく、古文書と松陰先生に絞り、取り組む事にしました。二つとも何となく続けています。以前基礎コースには数年お世話になりましたが、目標が持てず、途中で何となくやめてしまいました。今回の受講のきっかけは、ある人から組織を改革するには内部からでしかできない。明治維新がその代表的な例であると教わりました。

そこで、まず私は、「組織を内部から改革する」という視点から松陰先生を勉強し直すことを思い立ちました。具体的な手段として松陰先生は組織をどのように考えておられたのか、また、そのことを今の世の中に活かすには何が大切かを考えてみたいと思いました。もう一つの動機は、今年、娘たちが久しぶりにやって来て、その時、娘婿から「義父さん、九十五歳まで長生きしてください。」と励まされたことです。あと二十年あります。

このように先ほど述べた二つの動機を後述する手法を使い、いろいろ検討して何か新しいことができないかと考えています。

私は現役時代、高度成長期を過ぎました。退職後十年以上経ちましたが、今の現役世代の方々は、なかなか収入が増えない時代が続いています。いろいろな先生方は様々な原因を主張されています。

法を温存し、戦後の四五年体制から日本社会や我々が其処から抜け出せないでいることが原因だと考えています。

この基礎コースの学びと、自己研鑽の積み重ねによって、少しでも解決手段を見いだしていきたいと思っています。

今、ロシアと西隣のウクライナが戦争中ですが、日本はロシアの東隣です。戦後の四五年体制のままでは、我々が今の日本を否定し続けるのではなく、日本を肯定する国民に生まれ変わらねばならないと思います。しかし、正直何をどうしたらいいか、今はわかりません。

このコースでこれらの問題にどう取り組んだらよいか学びたいと思います。何か手段を見出すことができるとはいいかと思っています。

まずは松陰先生の取られた手段を現在のIT技術を使って何ができるか考えようと思います。

私は現役するとき「ブレイクスルー思考」という手法を学びました。この手法を使い、できるだけ松陰先生の一次資料に目を通し、さらに松陰全集等を分析して現在に適用できる方法を作り上げたいと思っています。

成果物ができれば、まずは論文化を行い、次に学会に公開し、起業家のネタになればと夢はひろがります。

今回の受講では、私の寿命が続く限り、この夢を現実にしていきたいと思っています。



人間愛を根底にした人柄・求學心・強い意志・信念と実働の力

第二回(八月二十七日)受講者 下関市豊浦町 麻野 和男

第二回目から勉強させていただいております。

元理事長の故松永祥甫先生を初め、理事・講師・事務局の先生や多くの塾友の方々に大変お世話になっていきます。

こんなに長く続いて勉強させていただくのは、松陰先生は元より、松風会での学習の雰囲気(講師の先生のご熱心なご指導と塾友の方々の求學心)のおかげだと思っています。

初めのころは三年一区切りの研修でした。巡検を終えて萩青年の家での宿泊、講義後の夜の欲談など楽しい中にも実益のある研修会でした。

松陰先生のお言葉や書簡は、私のような浅学の者にとっては大変難解でしたが、撰集の解説や講師のご指導、塾友との対話の中で理解(といっても上辺だけですが)することができるようになり、大変うれしい日々でした。今でもそうです。

講義を受けることにより、松陰先生のお書きになった書・文・詩歌等一字一句に熱いものを感じ、涙を流すことも度々ありました。

正に天より使命を与えられ、それを果たされ天上にお戻りになられたのだと思います。

家族の絆、藩公よりの強い信頼、師を求めての旅、友情、獄中での実働、すべて並の人間にはできないことばかりです。

強い意志と確固たる信念、命を懸けて事に当たってお姿に、万人驚嘆以外にはありません。しかし、ご自身

は「狂夫」鄙生、才能篤下など厳しい自己分析をされています。レベルの高い人ほど、自らを叱る正し、磨いておられます。不詳私も真似て(と言っても才なきにより自分で教えることができなないので、博学の方をお招きし)「もどき塾」なることをしました。

第一回は当時の理事長 松永祥甫先生にお願いし、地域の公民館で講演会を開催しました。九十八歳とは思えぬ四十分以上のお話に皆感動しておりました。二回目には、河村太一先生にお願いし、「教師塾」と題して現職の小・中学校の先生を対象に講義をしていただきました。

つまるところ、如何に自分の意志力の弱さ・確固たる信念がないことを痛感しました。ただ机上の学びだけで恥じるばかりです。

これは提案ですが、今研修塾に参加されている方は大変熱心な方で、松陰先生の研究に長けている方々だと思います。若い方が余りいません。後に継ぐには、若い人、わけても人を教育する学校の先生方の新任研修として必修講座に組み込んでもらえようになるといいなと思うのですが、やむにやまれぬ大和魂「留めおかまし大和魂」は少々難しいかも知れませんが、「親思ふ心」くらいはいけるかも？

令和3年度末の財務状況について

令和4年3月31日(単位:円)

(表一)

科 目	当年度	昨年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
普通預金	649,818	1,139,728	△ 489,910
定期預金	1,201,932	1,201,860	72
流動資産合計	1,851,750	2,341,588	△ 489,838
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
投資有価証券	81,930,498	76,435,339	5,495,159
特定口座	0	0	0
基本財産合計	81,930,498	76,435,339	5,495,159
(2) 特定資産			
退職給付引当資産	127,460	7,460	120,000
受取寄附金	3,929,888	4,277,371	△ 347,483
松陰群像維持管理資金	1,917,508	2,346,491	△ 428,983
特定資産合計	5,974,856	6,631,322	△ 656,466
(3) その他固定資産			
その他の固定資産合計	0	0	0
固定資産合計	87,905,354	83,066,661	4,838,693
資産合計	89,757,104	85,408,249	4,348,855
II 負債の部			
1. 流動負債			
流動負債合計	0	0	0
2. 固定負債			
退職給付引当金	127,460	7,460	120,000
固定負債合計	127,460	7,460	120,000
負債合計	127,460	7,460	120,000
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
受取寄附金	3,929,888	4,277,371	△ 347,483
寄付金	1,917,508	2,346,491	△ 428,983
指定正味財産合計	5,847,396	6,623,862	△ 776,466
(うち基本財産への充当額)	0	0	0
(うち特定資産への充当額)	(5,847,396)	(6,623,862)	(556,825)
2. 一般正味財産			
一般正味財産合計	83,782,248	78,776,927	5,005,321
(うち基本財産への充当額)	(44,897,913)	(41,886,566)	(3,011,347)
(うち特定資産への充当額)	(37,032,585)	(34,548,773)	(2,483,812)
正味財産合計	89,629,644	85,400,789	4,228,855
負債及び正味財産合計	89,757,104	85,408,249	4,348,855

本会は公益財団法人として吉田松陰先生の精神と教育について広く普及・啓発を図ると共に、吉田松陰先生を学び、豊かな人間性の涵養を図るため、研修会の開催やホームページ等を活用して情報提供を行っております。また、吉田松陰先生の研究や研修に取り組む団体・個人に対しての助成事業も継続的に実施するなどの公益事業を行っています。これら活動は、事業の公益性から令和2年度・三年度については、コロナ禍のため多くの事業が中止せざるを得ない状況でしたが、令和4年度は制限の緩和によって順調に事業が実施できています。

財務(表一)や事業(表二)の状況については公表することが義務づけられており、本紙面によって公表することとしました。また、今年度の本会役員については役員一覧(表三)のとおりです。

財政状況及び事業計画、並びに、役員一覧表について

公益財団法人松風会

(表二) 令和4年度事業計画

- 会議関係
- ◎ 定時評議員会 令和4年5月17日
 - ◎ 定例理事会
 - 第一回 令和4年4月20日(水)
 - 第二回 令和5年3月 日()
 - ◎ 臨時理事会
 - 第一回 令和4年5月25日(水)
 - ◎ 監事会 令和4年4月18日(月)
 - ◎ 研究研修事業委員会
 - 第十一回 「松陰先生に親しむ会」計画等
令和4年8月12日(金)
 - 第十四回松陰研修塾基礎コース二年次
研修計画 令和4年12月 日()
 - ◎ 松門編集会議
 - 第一回 令和4年7月5日(火)
 - 第二回 令和4年10月5日(水)
- 事業関係
- ◎ 研究研修事業関係
 - ◎ 第十四回松陰研修塾基礎コース一年次
 - 第一回 令和4年6月25日(土)
 - 第二回 令和4年8月27日(土)
 - 第三回 令和4年10月30日(日)
 - 第四回 令和5年1月28日(土)
 - 出前講座
 - 第十一回松陰先生に親しむ会
令和4年12月4日(日)
 - 吉田松陰撰集論説会 毎月第二土曜日
調査研究及び情報発信事業関係
 - ◎ 会報「松門」第四十四号発行
令和4年10月末

(表三) 役員一覧

- ◎ ホームページの運用
 - ◎ 松陰研究に関する問い合わせ
 - ◎ 研究用図書への購入整備
 - ◎ 資料展示室の運営委託事業
 - ◎ 維新群像維持・管理
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|----|------|----|------|----|------|----|-------|----|-------|----|------|----|------|----|------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 評議員 | 陶山具史 | 評議員 | 富永和信 | 評議員 | 小谷典子 | 評議員 | 吉村洋輔 | 評議員 | 渡邊哲郎 | 評議員 | 松本芳之 | 理事長 | 弘長純忠 | 理事 | 田村洋幸 | 理事 | 齊藤忠壽 | 理事 | 櫻井健一 | 理事 | 新江田智司 | 理事 | 友村知津子 | 理事 | 友定英章 | 理事 | 吉岡周三 | 監事 | 田邊克己 | 監事 | 麻野和男 | 外部委員 | 阿蔵順一 | 外部委員 | 蔵田順一 | 外部委員 | 阿武博道 | 外部委員 | 阿武博道 | 外部委員 | 阿武博道 | 外部委員 | 阿武博道 | 事務局長 | 川上修一 |
|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|----|------|----|------|----|------|----|-------|----|-------|----|------|----|------|----|------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
- 令和4年5月25日() (就任順)